

生活科学への自然地理学的アプローチ(第1報)

— 気象・気候に関する一般的文献について —

井上啓男・広 正義

An Approach Based on Physical Geography to Domestic Science (No.1)

— A Study of General Literatures on Meteorologic and Climatic —

H. INOUE and M. HIRO

はじめに

元来地理学はその隣接科学と密接な関係をもち、とくに自然地理学では地形・気候・水文の主な三分野が最近学際的性格を鮮明化している。気候学〔以下気象学の一部を含む〕が隣接科学として生活科学諸問題と、どのようにして接触してきたか、その経過を知りこれら分野の研究例を知ることは、生活科学の諸分野からの要求と自然地理学、とくに気候学の進歩とがうまくかみ合う形で定着しつつある生活気候（以下生活気象を含む）に対する認識を深め、それが今後の生活改善に重要な役割を果すものと考えているところである。言うまでもなく、日本の気候には四季がありそのそれぞれに特有の現象があり、各季節の変動にも一定のくせがある。われわれ日本人はこの中に何千年にわたり住みつき、その影響をうけて生活を送ってきたし、現在生活している。そして今後もその影響下で生活を続けていくはずである。だとすれば、気候という生活環境の一部で人間生活との深い係り合いが当然あり得るのである。

例えば、日常生活において衣類使用のコントロールには、おもな気候要素である気温が常にかかわり合い、食生活の場合食事と栄養の季節変化、各食糧の食味予測、さらに食中毒、食物の腐敗などには気候条件のかかわりが多い。住生活においても快的な感覚を求めるために室内の空気調節計画が気候条件とかかわりをもつ。また、人体の健康と疾病が気候と深くかかわるという観点から季節病カレンダーというものが日常生活の中に定着しつつある。一方近年多発する異常気象の影響により飢餓地帯の拡大さえも予想される。その他レジャー計画に際し気候条件が優先されることは、気象庁天気相談所に一年先の問い合わせがあることから肯ける。このような経緯を念頭に、生活科学諸分野と気候に関する研究調査のために、筆者とともに他の研究者にも資することを目的に関係文献の目録作成を試みた。本稿では第1報として、研究調査上最も必要を迫られるのはまず一般的書籍ではなからうかという筆者の判断（独断のそしりは免れないが）から、一般的な「生活と気候・気象に関する文献目録」ということになった。続いて、第2報ないし第3報として邦文の専門書、学術関係の諸雑誌から、さらに欧文関係の一般書、専門書、学術関係諸雑誌まで及びたいものと考えている。

なお、今回の目録作成に当り、動機的一端となったことを最後に付言しておきたい。

それは最近広中平祐博士が公にされた「若い日本人のための12章」のなかにある“学術は万人の中に”という印象的な一章の熟読である。

文献目録作成の方法

1. 生活科学のカテゴリーが最近では広範囲にわたってきているので次の如くジャンル別の目録作成を試みた。

(1) 衣・食・住・衛生（疾病）・災害・経済・レジャーなどを対象とするもの。

(2) 気候変動、異常気象などを対象とするもの。

(3) 気象・気候に関する歳時記。

（日本の四季や気象の移り変わりのなかから、日本人の季節観、自然観が心情的に読みとれるため。）

(4) 気象・気候に関する基礎知識のための文献。

（生活と気象・気候では、対象が広範囲にわたるので、基礎的な知識が正しく鮮明に整理されていることが必要として考えられる。）

(5) 気象・気候の専門用語を理解するための文献と統計や変遷などを知るための文献。

（研究調査に当っては、学術用語の意味を知る必要に迫られる。このため語数が多くしかも内容がくわしく解説的な記述があり、関連の数式・公式・数表・図表などまでを含む万能型の辞典（事典）、ハンドブックは必要である。また統計資料の有効的な活用が大きな比重を占める分野であるため年表・年鑑も常備されねばならないと考えられる。）

2. とりあげた書目は、昭和年代のものに限り、主として戦後出版のものとしたが一般に研究者（筆者を含め）が生活と気象・気候に関する研究調査上必要とする文献にはどのようなものがあるかということに心がけた。

3. 文献目録カードを作成し、文献配列順番号・書名・著（編）者名・発行所名・初版発行年（西暦）・総ページ数の順カード上に記録整理した。

4. 一般書が主体とはいえ、生活科学諸分野と気候に関し研究調査上一読を要するものは有効となるよう解題をし、内容紹介、位置づけも行った。

「衣・食・住・衛生（疾病）・災害・経済・レジャーなどを対象としている文献。」

001気象と人生：藤原咲平：岩波：1935：258P 一般書のなかで、気象と生活について多様な記述があるわが国最初の書として歴史的な意味がある。179～236Pに気象と人間生活についての記述があり、住居と気象、衣服と気候、食物と気候、衛生と気象、精神と気象との関係などの内容がある。

002天文や気象の話：藤原咲平：岩波：1935 308P 流行と気候、婦人と健康美、日本人は明るさを好む（建築に関して）など、家庭生活と気象（161～219P）の中で家政学的観点からの記述がある。隔世の感はあるが歴史的に意義深い書である。

003気候と文明：E.ハンチントン、間崎万里：岩波：1938：400P アメリカ・エール大学Huntington博士のcivilization and climate（1915）の訳書。気候の見地からの文明検討で、肉体・精神労働と温湿度の影響、作業と天候など、多くのデータをもとにした研究報告が豊富である。気候と人間、社会の関連をいち早く世に問うたことは世界的な反響を呼んだ。必読すべき古典。

004天気予報三十年：大谷東平：法政大出版局：1955：250P 生活と気象（209～249P）の中で寒天の“凍て呼び”水泳と水温、蟻と気象、靴と気象、スポーツと気象など、生活気象に関する随筆がユーモラスな筆致で記述されている。

005日本の気象：高橋浩一郎編：毎日新聞社：1956：281P 関口武氏による日本の気候と生活

(1～25P)の中に、気候ときもの、気候とすまい、季節と生活、気候と国民性、など、生活と気候についての記述がある。

006気象災害：寺田一彦：朝倉書店：1956：262P 台風、水害、旱害、冷害、落雷、雪害、霜害の各章において気象学的考察、対策を述べ、気象災害の解釈に科学性をとり入れる必要を論じている。

007気象と人生：大後美保：河出書房：1957：206P 生活は気象とふれ合う、夏のまき水、夏服と天候、虫の発生は陽気によって、劇場の気象を診断するなど、身近な日常生活に関係のある気象の随想随筆をまとめたもの。

008日本と世界の気象：荒川秀俊：東都書房：1959：264P 気温と生活(213～236P)に気温と、衣食住、気温と能率、体感温度、風と生活、雨雪と生活、などの生活気象に関する内容があり、特に気温にスポットを当てた記述。

009応用気象論：高橋浩一郎：岩波：1961：285P 気象と経済、環境気象の各章で、予報の経済効果、気象災害の保険、気象環境と人体の放熱、体感と生活能力などの論述があるが、理解するためには精読が必要。

010お金もうけ気象学：倉嶋・久門：番町書房：1963：252P 商業気象と言った方が、妥当と思われる。お天気でもうける。新聞天気図を利用する、お客の心理と天気、株価と天気など、消費生活と気候との関係が主題。

011旅と気象：斉藤鍊一：新潮社：1964：186P 早春の行楽地の天気、スキー・スケート場の気候など12ヶ月の代表的レジャーを抽出して気候との係りを述べている。季節の楽譜ともいえる。

012雨のち晴れ—新聞天気図の見方—：朝日新聞社会部：雪華社：1965：168P 朝日新聞に連載されたもの。目標を庶民の気象レベルに置き、歯切れがよく、引用も多く、わかりやすい気象解説書。天気を歴史、経済、社会、物理、医学とあらゆる面からとらえ例を引いて面白く書いているので、気象の一般教養書としてのしく読める一冊である。

013気象診断：大谷東平：地人書館：1966：306P 38年間の気象台(現気象庁)生活で体験したものをもとに、天気歳時記、気象放談、雑誌“コスモス”に掲載した台風十戒の三部からなる。災害防止活動に走り回るなかでの気象と生活にかかわる多くの話題を記している。

014気象と生活：大後美保編：海文堂：1968：210P 生活と気象に関する内容は多いがあくまでそれぞれについての概括的記述である。保健衛生と気象では、天気とからだ・気候の変わりめと健康・虫干しなど20篇、被服と気象では、衣服の性質と気象・冬の服装と気象など6篇、食事と気象では、食中毒の季節・寒さと食生活・食物の腐敗と気候など6篇、住居と気象では、涼しく暮す生活のくふう・住みよい室内気候など15篇、レジャーと気象では、読書と照明・鳥と天気・もみじ狩りなど6篇、火災と気象では、火災と気象・火災の季節に備えての2篇、などが内容である。

015日本気象風土記：関口武：旺文社：1968：244P 日本列島の気象と風土との関連性を述べている。日本列島を、北日本、東日本、中央日本、西日本にわけて、それぞれに季節感、特徴的現象、その地域に発生した関連の事例について文学的な筆致をみせる風土記。

016やさしい気象学：大塚竜藏：恒星社：1969：152P 昭和40年8月「くらしの気象学」として刊行されたものが再版に際し、やさしい気象学と改題された。故新田次郎氏が“国民のための気象学”という讃辞を序文の中で提した書。天気と生活気象について(73～124P)の第3章で、室内の暖房・水道管の凍結予防・不快指数と人間の活動・スモッグの季節など、くらしの気象についての記述がある。

017日本の山岳気象：飯田睦治郎：山と溪谷社：1970：257P 山の気象の全体的総論、登山者にとってこれだけは是非知っておかねばならない冬山、春山、夏山、秋山の気象というように四季の山の気象の基礎知識を記述。

018災害は進化する：木村耕三：講談社：1971：254P 気候変動と社会(93～154P)の中で人間社会の進化は災害の性質や危険性をも変化させるので、その変化の度合いを明らかにし、防災対策の根本

的改革を強調した書。

019台風に備える—あなたの防災対策—：NHK 社会部：日本放送協会：1972：291P 現代の台風災害の実態を多くの実例を通して分析し、気象情報の受けとめ方、災害への準備、心がまえなど台風に対する備えを平易に解説している。

020モンスーン—季節をはこぶ風—：倉嶋厚：河出書房：1972：251P モンスーンの発見、季節風と日本人の二章において、季節風が作り出す日本の季節の特徴と日本人の暮しや考えの中に投影されている季節のいくつかが論じられている。

021公害と気象—観測と調査の実際—：太田・長尾：地人書館：1974：242P 大気汚染を左右する気象の実態を克明に調べあげ、公害と気象のかかわりあいを解明し、観測とは、調査とは如何にし、どのように汚染防止に活用させるかを論じている。

022雨・風・寒暑の話：和達・倉嶋：日本放送協会：1974：235P 日本人の季節観、生活観を展開しながら自然環境と人間のかかわりを探り、四季の風土のなかで、日本人は自然の変化を豊かな感受性で受けとめるそとを述べている。

023自然改造の報復—気候と災害—：土屋巖：日経新書：1975：168P 環境問題への一つのアプローチとして、環境構成要素として最も大きな部分を占める気候について、環境気候学というものが存在してもよいということを前提にして、環境に対する自然改造の是非と限界を主に気候学的な観点から検討している。いいかえれば、今後の、新しい自然改造のあり方を探る論述である。

024旅の気象ガイド：百瀬成夫（監）：日本交通公社：1975：231P 多様な日本の気候が旅行とどうかかわりあっているかを解明している。そしてそれぞれの季節感が人々のくらしの風習、地形、植生とどのように結びついているかと、歳時記風に述べてある。旅行の計画、実現に参考となる。さらに春・夏・秋・冬の四季別に天気概況天気ごよみ、旅仕度、旅立ちそして具体例も記述されてある。

025気候と文明：大後美保：日本放送協会：1976：293P 気象と人間、生活文明の関係を説き、資源枯渇と人類破滅を阻止する現代文明と将来のあり方を示唆している。37～142Pにわたり、1. 人間と気候と文明（心理と気候・性格と気候・人口と気候など）、2. 食糧と気候と文明、3. 衣服と気候と文明（衣服素材の生産と気候・防暑、防寒の衣服と気候）、4. 住居と気候と文明（暑熱、寒冷、多湿、強風の各地方の住居）について論じている。

026天気が強くなる本—空模様が気になる人に—：有賀・宮内：エール出版：1976：174P 多様な日本の気象・気候が生活とどのようにかかわり合っているか、難しい気象の原理を出来るだけさけて、主婦にもわかりやすく解説している。なかでも湿度と生活（78～80P）、犯罪と暑さ（93～97P）などは生活気象に関する異色の記述である。

027ヒトの適応能—気候変化への適応を中心として—：吉村寿人：共立出版：1977：129P 異常気象、とくに氷河期再来といわれるなかで、農作物の冷害による不作、エネルギー資源枯渇という最悪の条件をいかにしてのりきるか、そこには気候変化への適応という問題があり本書が生れたように考えられる。

028暑さ寒さと人間—至適温度へのアプローチ—：三浦豊彦：中公新書：1977：196P 異常気象や都市の熱汚染が問題化されているなかで、温度は日常生活、労働、スポーツに深いかかわりをもつことを述べるとともに生体の体温コントロールメカニズム、労働やスポーツにおける有効な暑さ、寒さ対策、耐寒性、耐暑性の民族差や男女差、最近の冷暖房に対する批判などが論じられている。

029微気象の探求—生活のなかの観察と活用—：大後美保：日本放送協会：1977：253P 微気象のカテゴリーについての説明が簡潔で明解である。衣・食・住その他生活に関係のある微気象の果す役割についても説明がなされ、とくに、衣服については、第5章で衣服気候に37Pを割いて、衣服一般、帽子、はきもの、寝具にまでわたる気候との関連が述べられている。

030気象の周辺：根本順吉：玉川選書：1978：196P 雑誌「科学の実験」の巻頭に1年余にわた

り連載したものをまとめたもの。気象学を中心において、その周辺の学問や社会事業と気象がどんな深い係り合いを持つか、を考えたもので、医学・環境科学・防災・教育・芸術などを対象に記述している。

031気象ひとすじ：藤原・岡田・久米：学生社：1978：170P 気象が生活に及ぼす影響（126～141P）の中で、生活と気象の関係・精神と気象との関係・衣食住と気候・能率と気象の関係などの記述がある。これは旧著“気象と人生”のなかの気象と人間生活の再掲であろう。

032気象と火災—日本の風土と火災—：畠山久尚：全国加除法令出版：1978：239P 日本の火災の概況、それが気象と密接な関係を持つこと、ひいては火災の予防、警戒には気象を重視しなければならないことなどを内容としている。

033気候と文明・気候と歴史—気候と人間シリーズ—：鈴木・山本：朝倉書店：1978：144P 気候と文明では、気候変動と文明の盛衰・歴史の変転との密接な相関々係を古日記や貴重な統計資料などで探り解説している。

034人生お天気次第100選：藤井幸雄：産報出版：1979：222P 東京タイムス紙上に、“お茶の間天気図”として連載されたもので気象の解説・天気ことわざ・生活と気象・天気と健康の内容を写真と図解により親しみやすく視覚に主点をおいて記述している。生活気象に関するものでは、気候指数と住みよさの関係・経済を大きく支配する気象・カビとバイキンと気象条件・ゴキブリの繁殖と気温の関係・真夏に必要なビタミンの補給・日光の利用で暖かな住まい・春の紫外線は浴びすぎに毒・読書と勉強に適当な気温など豊富な記述がある。

035気候環境学概論：福井・吉野：東大出版会：1979：246P 第2篇の人間と気候環境（23～169P）は本書の主要部分をなすもので、衣食住との関係、病気と気候、エネルギーを中心とする人間活動、気候の影響が最も大きい第一次産業、さらに大気汚染、公害との関わりが多い都市を気候というサイドからどう考えるかなど、人間生活と気候について系統立てたまとめに特色がある書。

036全国のお天気：中村喜三雄：現代評論社：1980：210P 生活情報としての天気予報の書。一般のテレビ視聴者からの質問などをベースに、春夏秋冬の天気と天気予報の入門が内容となっているが、生活のなかでの天気の見方を解説したもの。

037自然読本—気象—：高橋・根本・関口・荒川・畠山・初山・大後・神山・鈴木・朝倉ほか：河出書房新社：1980：264P すまいと寒暑・気候風土とたべもの・季節病カレンダー・経済は気象に影響される、四季のくらしなど生活と気候気象に関する記述が多い。

038理科年表読本—気象と気候—：高橋・宮沢：丸善：1980：186P 理科年表（毎年度丸善より発行）を上手に使いこなすための手引書で、本書では、生活と気象・気候との関係を理科年表のデータで解説している。

039日本のお天気：大野義輝：大蔵省印刷局：1970：229P 古くから気象庁記者クラブづめになった新聞記者が、まず最初に読む本として定評のある書。日本の天気の特徴が四季を追って記され、生活にかかわる記述も多く、新聞などに出てくる報道気象用語が網羅されている。

040季節の事典：大後美保（編）：東京堂：1961：250P 内容中に生活と気候・気象に関し等値線図による全国分布状況が多くみられる。その主なものは、井戸水の温度と気温の年変化・オーバーを着ている人の割合の季節変化、オーバーを着はじめる時期、脱ぎはじめる時期・こたつを使い始める時期、使わなくなる時期・スポーツの種類と季節・東京都民の1人1日当たりビタミン消費量の季節的变化・野菜の出盛りの季節・旅行者のための衣服季節・魚類の出盛る時期など、多彩な分布図が見られる。

041天気と元気：藤巻時男：文芸春秋新社：1960：184P “気候とからだ”というなかに、温度と人体、風と人体、気圧と人体、日光と人体、空気イオン、空中電気と人体など。気候と病気のなかに、気象病とは、冬の病気、春の病気、梅雨期の病気、夏の病気、秋の病気、気圧配置の形と痛みなど。気象医学についての内容が豊富である。

042季節病カレンダー—文明と死の奇妙な関係—：**柊山政子**：講談社：1963：244P いろいろな病気の死亡率は、1年のうちにどう変化するか、その対策は、人間の死と季節の関係を豊富なデータをもとに探り、社会への警告としている。

043気象と人間：**神山恵三**：紀伊国新書：1964：199P 最も共通した人びとの日常の関心事である天気とからだのなかで正確性の問題にスポットを当てている。寒さ、暖房、気象病、紫外線、季節と病気、不快指数など10項目、さらにそれぞれについて小項目のテーマがある。

044天気と健康：**神山・藤井**：読売新聞社：1969：254P 読売新聞婦人欄に約5年間、主として主婦向けの記事として連載したものを中心に月々の生気象学上のハイライトに当たるも加えてまとめたもの。風、ほこりと眼病、暖房と脳出血、ガンの季節など月々の生気象とからだの四季について記述している。

045気候と人間：**エミール・デュオ・奥田・岡田・神山共訳**：白水社：1955：135P 気象医学、気候医学において考えられるすべての分野を網羅し、要領よく総括している。

046からだと天気—生気象学入門—：**ヘルマット・E.ライズバーク・倉崎・田崎共訳**：河出書房：1970：186P 気象が人の生命や健康に及ぼす影響を多面的に説いた生気象学の入門書、太陽と日焼け、寒さに耐える、伝染病と天気など12章からなる。

047疾病と地域・季節：**柊山政子**：大明堂：1971：210P 結核から現代の奇病、癌・公害病まで多くの疾病の蔓延状態と原因を分析し、地域・季節・文化程度などの差異がもたらす現代の問題点を解明している。

048人間・気象・病気—気候内科へのアプローチ—：**加地正郎他**：日本放送協会：1975：235P 寒いとなぜかぜをひくのか、最近の新しい医学の流れとしての生気象学の立場から、自然環境や人工環境条件が人間生体におよぼす影響を科学的に解明し、さらに病気との関連性について、気象内科の考え方を論じる。

049風土論・生気候—気候と人間シリーズ—：**千葉・柊山**：朝倉書店：1979：133P 生気候では、気候変化や地域と疾病との相関々係を季節病カレンダー等の資料で興味深く示している。

050天候とからだ—かぜからガンまで—：**ジュリアス・ファスト・西丸震哉訳**：三笠書房：1979：294P weather language (天候が語りかけるもの)の訳書。新しい科学「生物気象学」をどう日常生活にいかすか、天候をよく知ることが病気治療の第一歩、天気予報を「健康予報」として活用しよう、天候はからだの各部分とどのようにかわりあうかなど、これまでに類のない天候とからだ・心の問題を探求している。

「気候変動・異常気象などを対象としている文献。」

051異常気象—天明異変は再来するか—：**和田英夫編**：講談社：1965：244P 周期的にやってくる異常気象が意味するものは、対策はあるのか、予想は信頼できるのかなど異常気象を解明し全国民の不安に答えている。

052異常気象と環境汚染：**朝倉正**：共立出版：1972：212P 異常気候の原因を豊富なデータをもとに究明し、変わりゆく気候を予想した気候変化の啓蒙書。とくに環境汚染と関連させて本格的に異常気象を述べているのは特色がある。

053氷河期へ向う地球—異常気象からの警告—：**根本順吉**：風濤社：1973：222P 最近の異常気象と環境問題についての6篇からなる。雑誌中央公論・自然に掲載されたものを加筆あるいは抄出したものである。地球を覆う異常気象、きたるべき氷河時代への警告、気象性疾患の予報などが内容となっている。

054異常気象を追って—11年間の記録—：**根本順吉**：中公新書：1974：195P 北半球・南半球の

異常気象を追って太陽・海洋・火山爆発等気象変動の原因を研究しつづけた記録。

055地球は寒くなるか—小氷期と異常気象—：土屋巖：講談社：1975：206P 世界各地のデータをもとに、現在の異常気象の本態とその行方を究明し、気候変動が人類に及ぼす影響を長期的展望のもとに解明している。

056氷河期が来る—異常気象が告げる人間の危機—：根本順吉：光文社：1976：210P 気象学のデータをもとに第4間氷期がすでに終わり、地球は氷河期に突入しつつあるという事実を論証しながら人類の危機を予告した書。

057熱汚染：西沢利栄：三省堂：1977：220P 気候環境を理解するためには、気候形成の重要な要素、熱と水を常に念頭におかねばならない。最近都市には“熱の島”ができ、海には温排水が放出される。大地が熱で汚染され、自然のしくみがバランスを崩しはじめる兆しではなかろうかと教えてくれる。

058異常気象：朝日新聞科学部：朝日新聞社：1977：266P 氷河接近説を主張する根本順吉氏外4名がオーストラリアの温暖化現象を見る目的で昭和51年10月から11月にかけてオーストラリア・ニュージランドを調査した結果を“異常気象と食糧危機”と題してアサヒゼミナール集中講座で発表したものをまとめたもの。南北両半球の異常気象食糧危機の前兆など6篇から成る。

059異常気象の謎—地球に何かが起こり始めた—：根本順吉：サンボウジャーナル：1978：228P 内容は現場からのかなり荒げずりな現状報告であると述べているが、世界をおおう気候異変、太陽が異常気象の原因か、氷河時代はくるか、食糧とエネルギーの危機はやってくるかなど、異常気象に対する関心と呼ぶ内容。

060気候が変わる—そのインパクト—：高橋浩一郎：中央公論社：1980：168P 気候の変動と人間社会の変動との関連を分析して、世界的な大問題となりつつある気候インパクトの今後を予測し、20年後の21世紀をバラ色で期待することに対する警告の書。

「気象・気候に関する歳時記。」

061お天気歳時記：大野・平塚：雪華社：1964：286P 昭和38年1月から12月まで、1年間にわたり、「東京新聞」夕刊文化欄に書かれたものに、若干手を加えてまとめられたものである。いろいろの角度から日本の気象を観察して歳時記ふうに仕立てられている。1月から12月までを今日でもなお季節の到来を知らせる目印として民衆の間に親しまれている24節気にかけて日本人の生活観とのかかわりを述べている。

062お天気ごよみ：倉嶋厚：河出書房：1973：276P 四季の変化に富む日本の気象の特徴を統計をもとに解明し、日本人の暮しや季節感との関連を探っている。朝日新聞夕刊に9年間にわたり週1回ずつ“週末のお天気”として掲載されたものを歳時記風に整理したもの。

063風の塔—四季の科学随想—：関口武：時事通信社：1974：290P 学問・技術の進歩に対応した歳時記が作られるべきであるという主張である。ある意味での環境科学で自然・風土をそこに住む人々がどう受けとめ感じとっているか、それを研究すべきであると述べている。四季の移り変わり、社会風俗、生活をもち込んだ科学者の眼でみた清新な随想。

064カラー気象歳時記：関口武：山と溪谷社：1975：200P 日本の四季や、日々の天気の違いを、そこに住む人々がどう受けとめ、どう評価していたか、また現在どう評価しているかを調査し分析する研究分野があってもよいという主張の人間くさい気象学を目指すその方向へのアプローチである。即ち、最近の気候変動と日常生活の変革という新しい風土観、季節感を知る手引き書である。

065日本の四季—朝日小辞典シリーズ—：荒垣秀雄（編）：朝日新聞社：1976：274P 日本の季節と風土、なかに息づく動植物の生の営みを中心とした現代的歳時記で小辞典であると同時に日本の自然感、季節感についての読む事典となっている。

066お天気365日：サンケイ新聞社会部：住宅新報社：1978：268P 昭和51年1月5日から2年間、サンケイ新聞夕刊紙面に美しい写真と解説で“お天気アラカルト”と題して、飾られたものである。テーマはその時その時の生活に関する話題が気候（気象）との関連で述べられた歳時記である。きわめて明解な筆致で用語、数字も出るが、わかりやすくしてある。“ビール”という気温を引合いの話はおもしろい。

067健康歳時記：田多井・神山ほか3氏：有斐閣：1979：281P 1月に始まり12月に終わる12章構成をとり、それぞれの月三つの節で日常生活における健康のチェックポイントを指摘し、気候・気象と健康との関係を含めた将来へのビジョンを示している。

068ことばの歳時記：山本健吉：文芸春秋：1980：269P 日本の四季の美意識と生活の知恵に満ちた言葉をめぐる研究と随想の書。

069季節ノート 一お天気歳時記一：倉嶋厚：東海大学出版社：1980：199P 続売新聞に10年以上の長年月にわたり、毎週1回“婦人と生活欄”に「お茶の間歳時記」として書かれたもののうち昭和50年から53年の4年間のなかからとくに印象に残ったものを選んで四季にわけてまとめたもの。めぐる季節の中で考えた暮しや人事についての記述がまじっている。

070雲一気象歳時記 一気象と文化一：安藤隆夫：日本書籍：1980：191P NHKラジオで週1回放送された生活気象の話をまとめたもの。四季の出来事を日本人の生活や社会とのかかわりのなかから書き下ろした気象と文化との接触面をさぐる糸口となることを目標としている。

071ことばの季節：山本健吉：文芸春秋：1980：273P ことばの歳時記の続篇といえるが、日本の四季とことばの美しさを簡潔的確に点描している。

「気象・気候に関する基礎知識のための文献。」

072気象学（改稿）上・下：岡田武松：岩波：1934～35：1042P 上巻には、気温、気圧、湿度、風、降水量、日照など気象要素についての解説が主となっている。下巻では、低気圧、高気圧、天気、天気予報、気象光学、気象音響学、高層気象などで構成されている。気候学の基礎のひとつとして、気象学を学ぶことの必要性を教えられる。

073気候学：福井英一郎：古今書院：1938：566P 日本の気候学の育ての母といわれ初版以来親しまれている。日本自身の気候学として具体的に体系が示されている。気候の理論、気候の分布、気候の変化、特殊気候など気候に関するあらゆる現象をあますところなく記述しており、特に気候の分布については詳しい。出版以来40余年を経てはいるが現在にも生きている気候概念を教えるというすぐれた特徴をもち、研究者にとっては、気候をどう考えどうとらえ、どう表わすべきかは最も根本的なことで、そういう意味では研究者必読の書である。岡田：気象学（上・下）とともにわが国の気象・気候学の代表的古典。

074気候学 一気象学講座第9巻一：矢沢大二：地人書館：1956：106P 最近の気候学では気候をどのように見ており、これまでの気候学を土台にして、どういう方向に歩んでいるのかについて述べている。したがって気候学全分野をみわたすことはできない。高度の段階についての書。総観気候学の分野が一応まとめられてある。

075気候学 一現代地理学体系Ⅰのなかの自然地理・応用地理第2巻一：福井英一郎編：1962：454P 最近の気候学の成果が要領よく、しかも適確にまとめられていて、最もよく読まれる。気候環境で、大気候、小気候、微気候、都市気候などが述べられている。現在の日本の気候学研究者がほとんど執筆していて、その点で日本の気候学の高い水準を示すものとして意義がある。

076気候学概論：福井英一郎：朝倉書店：1961：256P 大学における気候学の教科書ならびに気候学の関連諸科学の研究者・技術者に絶好の書。気候学の内容と分類、気候要素、動気候、気候の分布、気候変化、気候と生活、世界の気候などが論じられている。

077小気候学 一局地気象学序説一：吉野正敏：地人書館：1961：274P 気象現象の微細な特性を、世界各地における研究と、多年にわたりわが国全土を意欲的に踏査、実証した成果を詳述した局地気象学。

078日本の天気：高橋浩一郎：岩波：1963：214P 日本の風土、春の空、梅雨、夏の天気、台風、冬の天気、変る気候の各章からなり、それぞれについて気象学的知識のほかに、生活気象や俳句の言葉なども記されている。

079日本の気候：倉嶋厚：古今書院：1966：240P 日本の気候を季節の観点でまとめたもの。日本の気候の特徴、季節の区分、気温の季節、雨の季節、雪氷の季節、雷雨の季節、風の季節、霧と煙霧の季節、空の季節の各章が内容となっている。

080自然地理学 I 一朝倉地理学講座 4 一：福井英一郎編：朝倉書店：1966：251P 気候を地理学と直接関連をもたせて、自然環境の一要素という立場からわかりやすく解説している。総説・大気候・小気候・気候と人類などが内容。

081気候学：吉野正敏：地人書館：1968：258P 総観気候学的にマイクロスケールからマイクロスケールまでの気候現象を系統的に論じている。入門的性格を重視して、各部門で総合報告や教科書をあげていることや、基礎的図表を多く入れていること、さらに南半球、熱帯、成層圏の気候の章は特色がある。

082大気の科学 一新しい気象の考え方一：小倉義光：日本放送協会：1968：221P 近代気象学を平易に解説したもので、大気の熱経済、地球をめぐる風など新しい観点から大気のさまざまな現象にスポットを当て、大気科学の全貌を多くの資料をもとに解明している。

083総観気象学：高橋浩一郎：岩波：1969：385P 日本の気候を動的にとらえ、その内容を記述している。気象学的考察が深められてあり気候現象の物理的意義を理解するための必読書。近代気候学理解のためにも最適。

084気象の科学：駒林誠：日本放送協会：1973：248P 気象学の新しい考え方に対する一般啓蒙書としては最適である。今日的テーマとしての大気汚染と取組む「環境の気象学」、豪雪、豪雨に対する「災害の気象学」、火星や金星を考察する「惑星の気象学」を三つ柱として今日的テーマを追求する現代の気象科学が平易に解説されてある。

085世界の気象：高橋浩一郎：毎日新聞社：1974：326P 日本の気象現象は、地球上の大規模な大気現象の中の一環として生起しているという観点から、日本の気候の特徴的現象の梅雨なども大気大循環の季節的現われであるなど、世界との関連で見る必要があると述べている。気候と生活、気候に及ぼす人間の活動などの記述がある。

086天気図の見かた：岡林一夫：保育社：1975：151P 天気図を気象衛生ノアによる写真と対比させ、最近の気象技術による予報の出し方などを紹介している。

087気候学 一自然地理学講座 2 一：吉野正敏：大明堂：1978：350P 気候学の基礎部門から各専門分野、そして学際的な面への応用へと、多数の図表を援用して論述されている。現代人の気候知識を得るための基本的な書。

088世界の気候・日本の気候 一気候と人間シリーズ一：吉野正敏：朝倉書店：1979：133P 地球上の気候を月別にながめながら気候のしくみを述べ、世界各国の特徴的気候の実例を示し、さらに日本の気候を概観している。環境問題重視の現在、気候をどう評価し、意義づけるか、豊富な図、写真を用いた記述。

089気象—地球科学講座 3 一：根本・倉嶋・新田・安藤他：共立出版：1979：296P 最先端の人たちによる最新の情報、技術が紹介され読みごたえのある気象学書。分担執筆にはよくある総花的なところ、項目によって物足りない感もあるが、一応必要事項は整理し網羅されている。気象・気候と起因する昨今の社会問題を考える際のハンドブックとして最適。

090 天気図と気象の本—基礎・観測・天気図・生活—：宮沢清治：国際地学協会：1978：121P
一般の人々が気象庁になにを望み、またなにを知りたいがっているか、気象学や天気図を文学的説得力のある文章で書いている。第Ⅲ部で気象と生活のテーマで、災害・レジャー・健康などを気象と関連させて述べている。

091 日曜日の気象学：毛利茂男：講談社：1980：227P 雨、風、雷など身近な大気現象の観測法とその結果得られるデータを生かした天気予報のための基礎知識をわかりやすく解説した新しい気象学入門の手引き書である。

「気象・気候学の専門用語・統計や変遷などを知るための文献。」

092 気象の事典：和達清夫：東京堂：1954：549P 非常に項目数の多い特色ある事典。有効な活用を目標としているので大項目と小項目とに項目を分けて記述しているので両項目を読めば、必要にして十分な知識が得られる。

093 気象学用語事典：桜庭信一（編）：いずみ書房：1960：166P 日・英・仏・露の4カ国語が対照されており標準的なものである。

094 気象用語辞典：松野満壽巳編：海文堂：1967：240P ポケット・サイズになっていて極めて手軽に利用できる。小型辞典としては項目も豊富に集録され解説もポイントをわかりやすい表現でまとめて述べている。

095 気象用語集 一英和・和英・仏英—：田島成昌編 成山堂：1969：364P 収録語数は、英和約3,200語、和英約2,100語、仏和約1,300語その他の語を含めると7,000語になる仏語の気象用語収録は特色がある。

096 文部省・学術用語集 一気象学編—：文部省・日本気象学会：産業図書：1975：140P わが国における複雑多様な学術用語を整理統一するためにつくられたもの。

097 天気の科学 一朝日小事典シリーズ：駒林誠編：朝日新聞社：1976：254P 気象・気候に関する大・中・小項目合せて156のテーマが内容。現在気象・気候学が到達している科学的水準と技術的水準を理解しやすく解説している。生活と気象・気候に関する項目も多い。

098 気象ハンドブック：気象ハンドブック編集委員会：朝倉書店：1979：686P 気象・気候に関する百科辞典ともいえる豊富な内容である。398—434Pの生活と気象は清新な情報。

099 気象年鑑：日本気象協会：森重出版・印刷局：1967：200P 昭和42年はじめてわが国で刊行され、以来毎年刊行が続いている。気候変動が世界各地で目立っているとき、年鑑の形で記録を残しておくことは基礎的な仕事として大切なことであるという主旨にもとづいて刊行されている。

100 理科年表：東京天文台：丸善：1979：256P この年表は一般理学の研究と応用に資するため1928年以降毎年発行され、昭55年版は第53冊目に当る。気象・気候の部は気象行の統計と計算値によっている。地点別に整理され、累年統計を知るにはこの年表が最適。

あとがき

生活科学にかかわる気象・気候の一般的文献100冊について解題を試みたが、今後の展望として、関口武博士（筑波大）の問題提起を吟味したいと思う。それは、気象風土評価学という新しい分野を目指してのアプローチである。すなわち日本の四季の気象状態は最近かなり大きく変わりつつある（近年の異常気象による四季のリズムの変化）がそれにも増して、それを受けとめるわれわれの側の日常生活の著しい、かつ急激な変動、変革は、科学技術の進歩という言葉で総括されようが、日常生活への科学技術の浸透による自然環境の人工調節の進歩は著し

いということである。となるとこれまでの季節感・風土性は弱体化せざるを得ないであろうし、生活科学にかかわる新しい季節感・風土観が予測されそうである。

参 考 文 献

- 1) 石田竜次郎：地理学研究のための文献と解題 51 - 64 古今書院（1969）
- 2) 日本気象学会機関誌：天気（1969 - 1971）
- 3) 山下脩二：日本の環境を考える本，地理Vo 1.22, No.12, 26 - 32（1977）
- 4) 日本気象学会機関誌：天気（1978 - 1980）
- 5) 大矢雅彦：自然地理学の学際性と社会への貢献，地理Vol. 25, No.1. 19 - 27（1980）